

Mary Postgate における メアリーの復讐と自己実現

松本和子

[I]

1914年8月、ドイツ軍のベルギー侵攻を知ったイギリスはドイツに宣戦布告する。長年ドイツの脅威を訴え、一戦交える日が来ることを予期していたラドヤード・キプリング (Rudyard Kipling, 1865-1936) は、宣戦布告について次のように友人に書き送っている——I confess I feel rather proud of the way in which England has bucked up at the pinch and tho', as you know, I am not an optimist by nature I can't help feeling cheerful over this.⁽¹⁾キプリングの伝記を著したバーケンヘッドはこの一通を含む同時期の私信に対し、“The one of his letters becomes one of buoyancy and sober optimism”⁽²⁾とコメントを付している。キプリングがどのように戦局を予想していたかを正確に知るのは難しいが、史実的には戦争勃発後しばらくの間イギリスは苦戦を強いられた。飛行船を強力な兵器として操るドイツ軍は1915年1月に最初の空爆で無防備なイギリスの町や村を襲ったのに続き、5月には首都ロンドンを標的にした大規模な爆撃を実行した。またたく間に戦争はイギリスの市民生活の中に浸透し、一般市民の犠牲者は増加の一途をたどった。

こうした厳しい現実を前に、キプリングは戦争を主題とした短編小説を三篇著す。一作目『掃き清められて、飾られて』 (*Swept and Garnished*) は1915年1月に *The Century Magazine* と *Nash's and Pall Mall Maga-*

zine に同時掲載後、1917年に短編集 *The Diversity of Creatures* に収録されている。ベルリンを舞台とするこの作品は、ドイツ軍の快進撃が伝えられる中、インフルエンザで高熱を出した女性がどこからともなくやって来た傷ついた子供たち——戦争の幼い犠牲者たちという設定——と僅かな時間、交流するという超自然的要素をもった話である。二作目『海の巡査』(*Sea Constables—A Tale of '15*) は趣きを大きく変え、病にかかった船長を政治的理由から救助しなかったために死に追いやってしまった出来事が仲間内の回想として語られる。1915年9月に *Metropolitan*, 10月に *Nash's Magazine* に掲載後、*Debts and Credits* に収録される。三作目にあたるのが本稿で取り上げる『メアリー・ポストゲイト』(*Mary Postgate*) である。

『メアリー・ポストゲイト』はキプリングの代表的リベンジストーリーとみなされる。じっさい、キプリングには多数のリベンジストーリーが存在し、「復讐」に寄せるキプリングの並々ならぬ関心の高さをあらわしている。Kipling Society のウェブサイトから *Themes in Kipling's Works* にアクセスすると⁽³⁾，“Retributions” がテーマのひとつに含まれていることが確認できる。そこには82の短編が含まれ、たとえば“Duty”や“Empire”といったキプリングとかわりの深いテーマと数の上で並んでいる。これら多数のいわゆる“リベンジもの”の中で『メアリー・ポストゲイト』を他の作品と一線を画すものとみなすひとつの根拠は、読者や批評家たちの露骨なまでに率直な反応に求められる。作品の批評には“dreadful”, “wicked”, “horrible”といった形容詞が繰り返し使われ、「キプリングのもっとも悪名高き作品」⁽⁴⁾、「キプリングの著作でいちばん攻撃を受けている作品」⁽⁵⁾と評されている。これらの酷評を正当化するのは、ストーリーの核となるメアリーの復讐行為が持つ卑劣さ、残酷さである。

『メアリー・ポストゲイト』のストーリーは、アウトラインをたどるだけであればきわめてわかりやすい。主人公の付添婦メアリー・ポストゲイトが、ドイツ軍パイロットと信じる青年を相手にウィン——雇い主ミス・

ファウラーの甥で出征中に死亡——の仇を討つ物語、と要約できる。ただしこれはあくまでもアウトライン、つまり物語の表層をたどることに専念した場合の単純化であり、『メアリー・ポストゲイト』が単純な作品であることを意味するものではない。執筆年から明らかなおり『メアリー・ポストゲイト』は難解なことで知られるキプリング後期の作品であり、内容、技巧の両面において一筋縄ではいかない複雑さを備えている。その最たるものは曖昧さである。後期作品の特徴を八項目に分類して論じたボーデルセンは、そのうちの項目のひとつに“a veritable cult of indirectness and concealment”⁽⁶⁾を挙げているが、『メアリー・ポストゲイト』において判然としない部分は実に多い。ミス・ファウラーが甥で孤児になっているウィンを突如引き取ることにしたのはなぜか、左の薬指に指輪をしているミス・ファウラーは結婚経験があるのか、それとも指輪に関係なく生涯未婚の婦人なのか、悲惨な死を遂げた少女エドナは、ドイツ軍の爆撃の犠牲者なのかあるいは伝えられたとおりの崩れた物置の下敷きになって命を落としたのか、すべてが謎に包まれている。アウトラインを記すときに「ドイツ軍パイロットと信じる青年」という歯切れの悪い表現を用いたが、それはこの青年の正体にも判然としない部分があるからである。

忠実にテキストを読む限りこの青年の国籍に関して言えるのは、メアリーが彼をドイツ軍パイロットだと信じていること、の一点に絞られる。“There was no doubt as to his nationality.”⁽⁷⁾と断言する彼女の意識に迷いはない。批評家の中にもメアリーの判断に沿う見解を示している人物は複数存在する。バーケンヘッドはそのひとりで、メアリーの行為を敵国人に対しての扱いとしてみている⁽⁸⁾。メアリーと同様に青年の国籍は自明だからであろうか、青年をドイツ人とみなす客観的根拠がテキストにないことについてバーケンヘッドは言及していない。当然のことながら、テキストに明記されていない事実を根拠にドイツ説に異を唱える批評家も後をたたない。たとえばマルコム・ページはフランス説を立てている⁽⁹⁾。青年の実在を疑問視するタイト⁽¹⁰⁾、一歩踏み込みメアリーの想像の産物、ない

しはハラシネーションだと考えるノーマン・ページ⁽¹¹⁾やジャレル⁽¹²⁾も無視できない。

こうした数々の曖昧さ、それもストーリーの中核に関わる部分に根ざした曖昧さは、『メアリー・ポストゲイト』がキプリングのリベンジストーリーの系譜に連なりながらも、他の同系統の小説が違和感なくおさまっているリベンジストーリーのフレームにはどこか馴染まない、異質な要素を持つ可能性を示唆する。その可能性を実証するために、本稿はメアリーの変貌を追いながら彼女の復讐行為を検証し、その意味を考察することを目的とする。

[II]

『メアリー・ポストゲイト』は作中にいちども姿を見せないひとりの女性——レディ・マッコーズランドの手紙で始まる。レディ・マッコーズランドとメアリーは雇用者・被雇用者の関係にあった。過去形で記すのは、彼女がまさにメアリーを手放そうとしているからである。冒頭パラグラフは、彼女が新しい雇用者に向けて書いたメアリーの推薦状で構成される。

Of Miss Mary Postgate, Lady McCausland wrote that she was ‘thoroughly conscientious, tidy, companionable, and ladylike. I am very sorry to part with her, and shall always be interested in her welfare. (341)

「申し分なく良心的」「几帳面」「付き合いやすい」「淑女らしい」と畳みかけるように褒め言葉が並ぶこの推薦状は、否が応でもメアリーに対する読者の印象を肯定的なものに方向づける。

ミス・ファウラーがどういう経緯でメアリーを雇うことになったのか、詳しい事情はすべて省かれているが唯一、二人を引き合わせたのがこの推

薦状であることは“Miss Fowler engaged her on this recommendation” (341) という一節から証明される。と言っても、ミス・ファウラーは並べられた褒め言葉をそのまま受け取ってメアリーを雇ったのではない。これまでに何人も付添婦を雇った経験があるこの初老の女性は、メアリーが推薦状どおりの働きぶりを示したことに驚き、そして満足する。レディ・マッコーズランドから立派な推薦状を用意してもらい、その働きぶりでミス・ファウラーを驚かせたメアリーはどのような付添婦だったのか、彼女のファウラー家での日常を追う。

付添婦という仕事は、ちょうどガヴァネスがそうであったように、ミドルクラスの女性が社会的体面を損なわずに家庭の外で働ける職種のひとつという位置を長らく保っていた。19世紀後半以降、女性の働き口が徐々に増えたこと、そして家の中で付添婦に相手をしてもらいながら過ごしていた上流階級に属する女性たちの行動半径が広がったことなどによる社会情勢の変化で、職業としての付添婦自体の需要が減り、20世紀半ばすぎにはほとんどなくなっている。メアリーは付添婦が残っていた終わりの方の時代に仕事をしていたと考えられる。一般的に仕事と言えば雇い主のお相手、といことになるが、メアリーの場合は、ミス・ファウラーが関節性リウマチを患っているために簡単な介護も行っていた。

ミス・ファウラーのお相手という面で、メアリーは完璧な付添婦であった。生彩を欠いた思い出話を聞かせられても不満一つ洩らさず、その場に応じた相槌でミス・ファウラーの機嫌をよくする術を彼女は自然に心得ていた。リウマチの介護についても億劫がらずに幌付き車椅子で外に連れ出すほか、日々の健康管理として決められた時間にお茶を出し、鉱泉水も与えていた。メアリーは身体の自由が利かないミス・ファウラーに代わってコミュニティーの一員として役目を果たすことも求められていたのだが、それについては次の一節が詳しく様子を語っている。

She was, too, a treasure at domestic accounts, for which the village

tradesmen, with their weekly books, love her not. Otherwise she had no enemies; provoked no jealousy even among the plainest; neither gossip nor slander had ever been traced to her; she supplied the odd place at the Rector's or the Doctor's table at half an hour's notice; she was a sort of public aunt to very many small children of the village street, whose parents while accepting everything, would have been swift to resent what they called 'patronage'; she served on the Village Nursing Committee as Miss Fowler's nominee when Miss Fowler was crippled by rheumatoid arthritis, and came out of six months' fortnightly meetings equally respected by all the cliques. (341)

順を追ってみていくと、村の商人が疎ましく感じるほど家計管理を正確に行っていることが最初に取り上げられ、続いて「どこにも取り柄のない顔立ちの女性たちでさえ嫉妬心をかきたてられることのない」容貌と、ゴシップ・中傷とは無縁の品行方正ぶりが伝えられる。カードゲームの欠員を喜んで埋めもすれば、親たちの反感を買うことなく村の子供たちにとっての「みんなのおばさん」的役割も果たす。さらに、ミス・ファウラーの代理として村の看護委員会に出席し、一目置かれる存在にもなっている。これらすべては、レディ・マッコーズランドの推薦文を読み直すまでもなく、メアリーが資質に恵まれた有能な付添婦であることを裏付ける。そして彼女の付添婦としての本領は、ウインの世話をとおして余すところなく発揮される。

“Miss Fowler's nephew, an unlovely orphan of eleven” (342) と素っ気なく紹介されるウインがファウラー家に引き取られた理由は伏せられている。ミス・ファウラーの決断によるものではあるが、そこに愛情があるとは到底思えず、また叔母としての責任を感じることもできない。引き取って早々、養育全般をメアリーに一任したミス・ファウラーは、以降、お金

や物を与えるだけの存在に徹した。一方のメアリーは、付添婦としての仕事に新たな負荷がかかったにもかかわらず、また自らの日常生活に大きな変化が生じるにもかかわらず、当然のごとくこの役目を引き受け、ウインの世話を始めた。学校から送られてくるリストや納入金のチェック、学校長をはじめとした学校関係者との通信、成績の確認、若者の心にまったく無理解なミス・ファウラーとの間に立って関係を取り持つこと、などがウインの学寮時代にメアリーが行った仕事である。疲れを知らないメアリーの献身ぶりには驚くばかりだが、これ以上に驚くのはウインの態度である。

学寮時代、ウインは休暇を利用してファウラー家に帰省するのだが、その機会を利用して日頃の礼をメアリーに言う気持ちは微塵も持ち合わせていなかった。それどころかメアリーをからかい、背中を叩き、庭中を追いかけまわす行為にでる。庭を追いかけまわす場面は“... chasing her bleating, round the garden, her large mouth open, her large nose high in air, at a stiff-necked shamle very like a camel's” (342) と描写されており、駱駝にたとえられる無様なメアリーの姿が哀れを誘う。メアリーが受け続けた行為は、虐待と言っても過言ではない。しかしながら、当の本人に被虐待者としての意識は欠落しており、彼女はウインの「お針子」(342)であり且つ「悪口の的」(342)「奴隷の役」(342)に甘んじていた。

学寮生活を終えたウインはロンドンで勤めを始めるが、社会に出てもおメアリーのことをからかい続けた。やがて開戦にともないウインは入隊する。ウインはさっそくカーディガンとチョッキを送るよう手紙で言いつけ、メアリーは編み棒と毛糸を買いに走る。飛行部隊に所属したウインは機械の図表や飛行船の構造図を持ち帰って説明し、メアリーに覚えこむよう強要する。当然のことながらメアリーにおぼえこむ能力はなく、次回の訪問時にウインが行うテストに不合格する。「羊にも劣る頭」(343)で「空き缶よりも役に立たない」(343)と口汚くののしられるはめになった。

どこまでも居丈高なウインと、卑屈なまでにウインに従順なメアリーが好対照をなすこの場面は、*Nash's and Pall Mall Magazine* に掲載された2

枚のイラストのうちの1枚が取り上げている。図版の中央に描かれているのは、軍服に身を包み、両手を腰に威張った風情のウィンである。いささかさげすむような表情をたたえた彼の視線の先には、飛行機の図を険しい表情で見つめるメアリーが座っている。図面の近くには編みかけの作品と毛糸、編み棒が見える。ウィンとメアリーの力関係が視覚的に確認できる点でこの図版は興味深い。前景化されている二人によって見えにくくはなっているものの、ウインの背後に裕福そうな身なりでソファーに悠然と腰をおろし、距離を置いて冷やかに二人を見ているミス・ファウラーの姿も認められる。

立場はまったく異なるものの、ミス・ファウラーとウィンとは互いに関係する二つの共通点を持つ。ひとつはメアリーの働きに依存しているという点である。ミス・ファウラーにとって生活全般の面倒をみってくれるメアリーのいない日常は考えられないであろうし、ウィンも、自分に対してまったく愛情も理解も示さないミス・ファウラーとの仲を取り持ってくれるメアリーがいなければ、金銭的援助が打ち切られる可能性が濃厚になる。もう一つの共通点は、メアリーに対する無神経ぶりである。二人ともメアリーの気持ちに終始一貫、無頓着である。ミス・ファウラーはまったくの偶然から、十一年間も世話をかけておきながらメアリーの話に耳を傾けたことがない点に思い当たる。彼女は驚いた面持ちでこう叫ぶ——“Eleven! And you’ve never told me anything that matters in all that while. Looking back, it seems to me that I’ve done all the talking.” (344) 自分ばかりが話をしていたことに気づいた瞬間である。ところがメアリーはミス・ファウラーを責めるでもなく “I’m afraid I’m not much of a conversationalist. As Wynn says, I haven’t the mind.....” (345) とつぶやくだけである。ウインの場合にも同じパターンがあらわれる。図面についてのもの覚えの悪さをウィンからとがめられて入る場面を例にとると、メアリーに対する辛らつな物言いを聞きとがめたミス・ファウラーがウィンに皮肉をこめて “I suppose that’s how your superior officer talks to you?” (343) と注意を

したところ、メアリーはこう返事をしている——“Why? Was Wynn saying anything? I shall get this right next time you come.” (343)

優れた付添婦の名をほしいままにしているメアリーであるが、そこには見返りを期待することなくひたすら仕事に忠実な姿勢が確認される。ミス・ファウラー、ウィン、メアリーが作る関係の輪は、ウィンが戦争の犠牲にならなければそれなりにうまく回転していたかもしれない。しかし、12月のある日、ウインの訃報がファウラー家に届いたことを境にメアリーに変化が生じる。

[III]

ウインの公式死亡通知が届いたとき、メアリーは冷静そのものだった。淡々と事実をミス・ファウラーに伝え、短い言葉を交わした後、疲れたと言う彼女をベッドに休ませる。そしてウインの子供時代のことを話題にしたのも束の間、遺品整理の話、葬儀の話、埋葬の段取りなど事務的な話を進めていくメアリーに取り乱した様子はかけらもない。この平静そのものの落ち着きぶりと数日後の残忍な復讐行為とはたしかに乖離しており、一見、復讐が衝動的な行動のように感じられる。しかしそれは誤りである。試験飛行中の事故が死を招いたことを知ったミス・ファウラーのセリフ——「きっとこういうことが起こると思っていましたよ。でも、何もしないで命を落としたのは気の毒なことです」(345)——に対してメアリーはこう答えている——「誰かを殺してから戦闘中に死んだのではないのはひどく残念です」(345)。ここに明らかな露骨な暴力性は注目に値する。「申し分なく良心的」で「淑女らしい」理想的な付添婦の発言とはにわかに信じがたい。復讐者としてのメアリーが生まれる兆候はここに求められる。

メアリーとドイツ軍パイロットと思われる青年の出会いはまったくの偶然であった。ウインの遺品整理を終えたメアリーは、処分品を燃やすための準備を着々と進める。雨にもかかわらず手押し車に入れた物品をひとま

ず裏庭に運び込んだ後、パラフィンの瓶と火かき棒などを手に出なおしてきたメアリーは焼却炉そばの茂みからうめき声を聞く。いぶかしく思いながらも火をつけた彼女は炎の明かりで樫の木の根元にくずおれた青年を発見する。枝や葉の散らばり具合、木にかかったヘルメットから、彼が飛行中に落ちたことは明白であった。全身の骨を折り息も絶え絶えに発せられる片言の英語を聞いたメアリーは彼がドイツ軍パイロットだと直感し、怒りに我を忘れる。この後、メアリーは彼を残して自宅に戻りピストルを取ってくる。

リアリズムの手法で描かれているメアリーの復讐場面は、リアリティをもって迫ってくる。刻一刻と死に近づく青年を時に笑みを浮かべ、また時に罵声を浴びせながら放置し続けるメアリーの様子、一縷の望みに向け、助けを求め続ける青年の姿、吹き込む雨にもかかわらずめらめらとウインの遺品を燃やし尽くす炉の中の炎などが目に浮かぶように鮮やかに記されている。この情景は挿絵として *The Century* と *Nash's and Pall Mall Magazine* のどちらも 1915 年 9 月号に見ることができる。 *The Century* の挿絵は画面中央に樫の木とその根元にもたれかかる青年を描き、その左前方にすくっと立ったメアリーを配している。地面に転がる大枝と散らばる葉は衝撃の強さを物語り、糸が切れた操り人形を思わせる奇妙なかつこうの青年が瀕死の重傷を負っていることを説明する。メアリーは右手にピストルを、左手には火かき棒を持ち、決然とした表情からは殺気がみなぎっている。焼却炉は描かれていないが、スポットライトをあびたかのように暗闇から二人を浮き出させている炎によってその存在を示している。 *Nash's and Pall Mall Magazine* も中央に青年、左にメアリーを描いているが、構図に大きな違いがある。こちらの挿絵はメアリーが青年を見下ろす構図になっており、彼女が支配的立場にあることが強調されている。青年は目を見開き、恐ろしげな苦悶の表情を浮かべている。二人は至近距離にいるが視線が交わることはない。

青年は息も絶え絶えに助けを求め続けるが、やがて断末魔を残し事切れ

る。メアリーの徹底した拒絶が招いた死であることは間違いない。なぜここまで非人間的な行為に走れたのか、その原因を探ってゆくとまず行き当たるのがウィンへの愛情である。引き取られた直後から亡くなるまでの九年間、メアリーはウィンに尽くし続けた。メアリーがいかにも熱心にウインの面倒をみたかを示す描写が、断片的な記述を合わせると全体の半分近くにまでおよぶ事実は、彼女の愛情がほとんど溺愛の域に達していたことを証明する。特にウインの成人後、メアリーのウィンへの接し方は、その溺愛の感を強くする。死後のエピソードとして、軍服を誰かに譲ろうと考えたミス・ファウラーがウインのサイズを尋ねたとき、メアリーが間髪入れず「5フィート8.5インチ、胸周りは36インチ、でもこのところ1.5インチ増えたと言っていました」(347)と答える箇所があるが、これは、入隊後もウインの身の回りの世話をメアリーがまだ焼き続けていたことを示す。じっさい、ウインの遺品からは、メアリーの溺愛ぶりの証拠であるしるしが縫い付けられた下着が出てきている。これだけ激しい愛情を注いでいたウインを突然失ったメアリーが、激しい怒りをドイツ軍パイロットと信じる青年にぶつけたとしても不思議はない。

メアリーのこの愛情は、見方を変えると使命感にもつながる。先に確認したとおり、メアリーはウィンが敵をひとりも殺さないうちに命を落としたことに深い同情を寄せていた。その気の毒なウィンにかわって自分が敵の命を奪えばウィンも浮かばれるであろう、逆に、自分が敵の息の根を止めそこなえばウインの死はまったくの無駄になってしまう——こうメアリーは考えた可能性がある。この可能性を強めるのは、復讐行為の最中にメアリーの言葉に突然起きたひとつの変化である。医者を呼んでくれるよう呻く青年に向かってメアリーは“Stop that, you bloody pagan!” (354)とどなりつける。「付添婦メアリー」の言葉とは到底思えないセリフであるが、これはウィンが使っていたセリフであることが直後に明かされる。「自然に」(354)「滑らかに」(354)発せられたという事実と相俟って、メアリーの心のどこかで生じているウィンとの同一化がここに垣間見られる。

ウィンとの同一化は、「自分が青年を殺せばウィンが殺したことになり彼の無念が晴れる。したがって、無念を晴らすためにウィンになりかわって私が殺さなければならない」という使命感が芽生える土壌を生む。最期を思わせる呻きが聞こえてきてもなお“Go on,” ... “That isn’t the end.” (355) と言い、本当の断末魔を聞き届けるまでその場を動こうとしない徹底した残酷ぶりは、使命感と結びついたウィンへの愛情に端を発したものと思われる。メアリーはかつてウィンのために持っていた編み棒と縫い針を、同じくウィンのためにピストルと火かきぼうに持ち替えたと言えよう。

メアリーを極端な行為に向かわせたさらなる要因をつきとめるため、復讐行為を詳細にわたって検討するとクローズアップされるのは行為中に漂うメアリーの自己陶醉である。彼女の自己陶醉は、ウインの使っていた乱暴な言葉で青年を一喝した後、遺品を火かき棒でかき回しながら始まった。骨の髄までほてるのを感じた彼女は、それまで歌ったことなどない鼻歌を歌い出す。時折、青年をどなりつけるために中断こそしているが、青年の死が時間の問題になるにつれ、彼女の心は昂揚し、最後は陶醉感に包まれる。トムをはじめ性的なものと結び付けてとらえる研究者が多いことが指すとおり、メアリーの陶醉感の特徴は描写の生々しさにある。

This arranged, she leaned on the poker and waited, while an increasing rapture laid hold on her. She ceased to think. She gave herself up to feel. Her long pleasure was broken by a sound that she had waited for in agony several times in her life. She leaned forward and listened, smiling. There could be no mistake. She closed her eyes and drank it in. ... Mary Postgate drew her breath short between her teeth and shivered from head to foot. (355)

たとえば上記引用は、雨が入り込まないよう焼却炉のふたを調整し終えたメアリーが確実に死に向かっている青年を傍らに至福に包まれている場

面と、省略部分を境に、青年が絶命した直後の場面である。心身ともどもここまで深くメアリーを解放させた自己陶醉を分析すると二つの側面が浮き彫りになる。ひとつは、独力で事を成し遂げたことによる陶醉である。

メアリーはいかに有能であっても一付添婦としてミス・ファウラーに雇ってもらっている。ミス・ファウラーあつてのメアリーという厳然たる雇用形態がある以上、メアリーがミス・ファウラーを差し置いて何かすることは認められない。〔Ⅱ〕の引用部分で確認するまでもなく、彼女はミス・ファウラーの代わりに家計を預かり、代理として委員会に出席している。「代わり」「代理」という位置づけは、ミス・ファウラーとは直接関係のない村の中でもメアリーについてまわる。都合が悪くなった人の「代理」でカードゲームに呼ばれ、実の親の「代わり」を果たす村の子供たち共通のおばさん、それが村での彼女の役回りだった。そして決定的なのはウィンの母親ではなく、本来面倒をみるのが自然なミス・ファウラーの「代理」で世話をしている「母親代わり」であることである。メアリーは母親のように愛情を注ぐことはできても、母親として愛情を注ぐことはかなわない立場にいつづける。こういったメアリーにとって、自分で決め、自分ひとりで決行した行為というのは、青年に対する復讐が始めてである。思い通りの行動を独力でとった、そしてそれに成功した喜びは、青年が絶命したときの彼女の様子——“That’s all right,” she said contentedly, and went up to the house” (355) から察するに「自分の意思にそった行動をとれる自分」の実現に伴う陶醉感を覚ええてもおかしくないほど大きかったと考えられる。

自己陶醉のもうひとつの側面は、「女性」としての仕事を果たしている自分に対する陶醉とみなせる。まもなく青年が死ぬことが明らかな時点で気分よく鼻歌を歌った後、彼女は次のことに思い当たる——「これは女性の仕事だ」(354)。彼女が言う「女性の仕事」とは何を指すのか、この答えについては、復讐が佳境にはいつてからのメアリーの言動が手がかりを与えてくれる。

[IV]

直接手をくだしていないものの、メアリーが青年に対して行っているのは殺人行為に他ならない。女性登場人物が殺人者という設定は当時としてはまだ多くはなく、殺害方法の酷さを差し引いても、じゅうぶん注目される理由がある。メアリーの場合、殺人者として興味深いのは、自らの行為を誇らしく感じている点である。彼女は自分が「ヘニス医師はもちろん、どんな男性にだってできない」(354) 仕事をしているとほくそ笑む。彼女の心を占めるのは、男性はスポーツマン精神の美名の下、一刻を争って助けを呼び、この瀕死の青年を——メアリーは彼を“It” (355) と表現している——家の中へと運びこむだろうが、自分はいくまでも敵国人に応じた制裁を加えられる、という自信と誇りである。第一次世界大戦中、負傷し敵国兵士に対してどのような対応がなされていたのかについて、キプリング協会のウェブサイトは、撃ち落とされた後、民間人に制裁を加えられた英軍パイロットがドイツ軍によって病院に搬送され手当てを受けたという1914年11月の記事と、飲み水を求めている風情の弱ったイギリス軍捕虜がいるそばに立ち、これ見よがしに地面に向かって水をこぼすドイツ人女性を描いたプロパガンダ用ポスターを紹介している。後者とメアリーの行動には接点を感じられる。

メアリーが引き合いだしたヘニス医師というのは、村の有力者で特別巡査を兼ねた医師をさす。彼とメアリーとは数時間前に出会っている。この日のメアリーの行動を手短かにたどると、まず午前中にウインの葬儀をすませる。ここでも彼女は最初から参列する気のないミス・ファウラーの「代理」を兼ねて出席している。葬儀後、帰宅した彼女は遺品から選り分けた不用品を手押し車に積み、燃やすために裏庭に行く準備を始める。積み終わると休みもせずに追加用パラフィンを買いに村へと向かう。途中、プロペラの音が聞こえたような気がして探したが霧で見通しがきかず、そのまま目的地の店へ行く。店を出た立ち話をしていた看護婦のエデンとの

別れ際、惨事は起こる。大音響と子供の悲鳴を聞きつけた二人は音のした方向へ駆けつけ、そこで重傷を負った9歳のエドナを見つける。『掃き清められて、飾られて』に登場する戦争で深く傷ついた子供を彷彿させるエドナの悲惨な描写——身体を包むシートと抱え上げたエデンの制服をみるみる赤く染めるほどの出血、引き裂かれてしまった身体など——は彼女が危篤であることを暗示する。エデンの指示でメアリーが呼びに行った医師が、ヘニス医師である。

プロペラの音を聞いた気がするメアリーはこの事件が飛行機からの爆弾で起こったと推理する。直前に聞こえた大音響、小屋が破壊されている現場の状況、エドナの傷の程度、そして30分ほど前に飛行機が飛んで行ったと語るミス・ファウラーの証言を考慮すると、彼女の推測は正しいと考えられる。しかし、ヘニスはメアリーの言い分に聞く耳をもたず、村人の混乱を恐れて単なる事故ですまそうとする。押しつけの事故説を受け入れるのを躊躇するメアリーを前に態度を硬化させた医師はメアリーをほとんど脅しにかかる。

'I saw it,' said Mary, shaking her head. 'I heard it too.' 'Well, we cannot be sure.' Dr Hennis changed his tone completely. 'I know both you and Nurse Eden (I've been speaking to her) are perfectly trustworthy, and I can rely on you not to say anything—yet at least. It is no good to stir up people unless—' 'Oh, I never do—anyhow,' said Mary, and Dr Hennis went on to the county town. (351)

結局、エドナは老朽化した馬小屋が崩れたために下敷きになって命を落としたことにさせられてしまう。メアリーはこのやりとりの後、事件の真相を暴こうとしたりはせず沈黙を守っていた。その沈黙が破れて口をついたのが独白「ヘニス医師はもちろん……」である。数時間前に口止めを余儀なくされ歴然たる力の差をみせつけられた彼女は、ヘニス医師にはでき

ない復讐行為をやりとげることで彼よりも上の立場に立つことができた自分を感じる。立場の逆転による優越感が、女性としての仕事を果たしている自分に対する陶酔を増幅させたとしてもおかしくない。

メアリーを「女性」という角度から理解しようとするとき、彼女のセクシュアリティのあり方は重要な意味を持つ。メアリーのセクシュアリティの扱いに着目すると最初に気づくのは彼女のセクシュアリティが消されているという点である。たとえば、メアリーは村の男性ともファウラー家に雇われている男性とも、親しく接していた形跡がない。無論、村が戦争に巻き込まれてゆく状況描写が示すとおり、出征によって男性が減ってきている事実も無関係とはいえない。兄と事業を始めようとしていた牧師の息子、カナダで果物栽培をするはずだった大佐の甥、聖職に身をささげようとしていたミス・グラントの息子などが兵役に付き、ファウラー家の中でも入隊を勧めるミス・ファウラーの意向に沿って庭師が全員辞めた結果、男性は下働きのチープ一人を残すだけになっている。しかしこの事実を除いても、メアリーは男性にとって仕事ぶりに一目置かれているだけの女性だったと推測される。

ところどころに記されているメアリーの外見もまたセクシュアリティを感じさせるものとはいいがたい。容貌については先に取り上げたとおり、十人並みであることが記されている。体型についても、「狭い背中」(342)、「細い腕」(345)、「平たい胸」(346)という、およそセクシュアリティを感じさせない描写が並ぶ。ちなみに、挿絵に描かれているメアリーは彼女の体型描写を忠実に再現している。

メアリーの人物像をとらえるうえで複雑なのは、このようにセクシュアリティを感じさせないよう描かれていながら、現実にはセクシュアリティが存在している点にある。メアリーを理解するには、ここにみられる見かけと実体とのねじれを解かなければならない。メイソンは『メアリー・ポストゲイト』に *frustrated passion* を感じている批評家だが、彼の言葉を借りると、メアリーには *frustrated sexuality* があつたと考えられる。彼

女が自らの定義に基づく「女の仕事」——夫、子供のために幸せな家庭を作ること——をしそこなったことに悔しさ混じりの劣等感を持っていることは明らかである。メアリーは短い間に二度も続けて自分は「(幸せな家庭づくりに) 失敗した」(355) と口にしていて、「女性の仕事について進歩的な考えを信じたことはまったくなかった」(354) というメアリー自身の言葉を信じるなら、彼女が意識的に「結婚、出産を経て幸せな家庭を築く」という当時社会通念化していた女性のライフスタイルに反発して独り暮らしを選んだとは考えにくい。いつのまにか年齢を重ね、気が付いた時にはセクシュアリティを封印して独り身で暮らす選択肢しか残っていなかった、と考える方が妥当であろう。

メアリーがある時点でセクシュアリティを封印したことを裏付けるヒントは、彼女のウィンに対する接し方に見出せる。メアリーはウィンを溺愛していた。その溺愛は、封印されたセクシュアリティがウィンとの出会いによって母性にとりこまれ、いっきに彼をはけ口にあふれ出した結果、生じたものと考えられる。メアリーにとってウィンに愛情を注ぐことは、鬱々と抱え込んでいたセクシュアリティを、母性という非難されることのない形態に姿をかえて発散させる一つの方法であった可能性は高い。メアリーが虐待に近い仕打ちを受けながらもウィンを可愛がり続けたのは、彼を愛していたから、という以外に、自らのセクシュアリティの発散という自己本位な目的を果たすために彼女にはウィンが必要だったから、という別の理由があったからではなからうか。

最期を迎えようとする青年の傍らでメアリーが身を任せる陶醉感は、すでに引用した部分に明らかなように性的なニュアンスを帯びている。これはこれまで厳しい自己規制より封印してきたセクシュアリティがウィンの仇を思い通りとれた勝利感をきっかけに顕在化したものと考えられる。彼女が“sanctuary” (352) と呼ぶ、周囲を扉で囲まれ木が鬱蒼と茂っているこの裏庭が彼女に与える密室的安心は、彼女がセクシュアリティを解放するのを促している。メアリーは、この聖域で社会の規範にのっとった女性

の仕事こそし損なったものの、男性にはできない仕事、つまり情け容赦ない見殺しを果たし、自分なりの方法と論理で、個人としてまた女性としての自己実現を遂げたとみなせる。

[V]

メアリーが復讐に乗じて自己実現を遂げたことに確証を与えるのは最終パラグラフである。そこには青年の絶命の瞬間とメアリーの興奮ぶり、そして帰宅後の光景が凝縮されている。メアリーが遺品を燃やすために家を出てから戻ってくるまで、時間にして僅か三時間ほどだと推測されるが、戻ってきた彼女は自己実現によって変貌を遂げており、それまでの彼女とは別人になっている。このことを端的に示すのが入浴のエピソードである。

メアリーは帰るなり *luxurious hot bath* (355) に入る。時は戦時中であり、付添婦を雇えるほどのファウラー家でさえ食費の切り詰めをやむなくされる状況であるにもかかわらず、である。日頃のメアリーの行動基準からすると暴挙にちかいこの行動は *scandalized the whole routine* (355) と表現され、当然のことながら家のものを驚かせる。この入浴は、裏庭では絶命した青年が冷たい雨に打たれている状況を考えてとかなりグロテスクな行動でもある。入浴後もメアリーの様子はいつもと違っていた。ミス・ファウラーがいるにもかかわらず大胆にも湯上りの完全にくつろいだ風情で彼女はソファーに身を横たえる。「淑女らしく」という推薦文をもってきた付添婦メアリーの面影はどこにもない。解放感にひたるメアリーをみてミス・ファウラーは *"quite handsome!"* (355) と声をもらすが、この一言は、遺品を運ぶメアリーを窓辺から見ていたときに発した彼女自身の言葉——*"Mary's an old woman. I never realized it before."* (349) と大きく矛盾している。メアリーは自己を実現したことにより行動のみならず容貌も様変わりしたことがここに明らかになる。非日常の世界から日常の世界へ彼女は戻ってきたが、戻ってきた彼女は新生メアリーとも言える新しい

メアリーへ大きく変貌を遂げていた。

以上述べてきたことを踏まえ、『メアリー・ポストゲイト』における復讐の全体像をとらえると、メアリーの復讐にはウィンの仇打ちと彼女自身の自己実現という二重の意味がみえてくる。前者の意味は「リベンジストーリーの核」として、後者の意味は「自己実現を果たしたメアリーのサクセスストーリーの核」としてそれぞれ機能している。批評家トムキンはキプリングの後期短編を例にとり、表面には現れていないストーリーの存在を示唆しているが⁽¹³⁾、『メアリー・ポストゲイト』には、表面上の「リベンジストーリーとしてのプロット」と表面下の「サクセスストーリーとしてのプロット」の両方が確認できる。両プロットは復讐行為を通じて同時進行しているが、その方向性は正反対である。リベンジストーリーは青年の絶命という「死」の方向性を持つのに対し、サクセスストーリーは自己実現によって生まれ変わったメアリーの誕生、つまり「生」へ向かう方向性を持つ。殺人の背後にある「死」と「生」のプロットの交錯、そしてたとえ敵であってもひとりの人間の死を踏み台に自己実現を遂げ幸福感に浸るひとりの人間がいるという人のエゴイスティックな面に向けられた作者の洞察、これがこの作品を単なるリベンジストーリーの枠から大きく逸脱させ、復讐を扱った作品群の中でひとときわ異彩を放つ小説に仕立てた要因だと考える。

Notes

- (1) Thomas Pinney, ed. *The Letters of Rudyard Kipling, vol. 4: 1911-1919* (London: Macmillan, 1996) 250.
- (2) Lord Birkenhead, *Rudyard Kipling* (London: Weidenfeld & Nicolson, 1978) 259.
- (3) The Kipling Society <<http://www.kipling.org.uk/>> Themes in Kipling's Work については <<http://work.remoteuser.co.uk/kipling/search/themes.asp>> 2010/10/02 確認.
- (4) J. I. M. Stewart, *Rudyard Kipling* (New York: Dodd, Mead & Co., 1996)

163.

- (5) W. W. Robson, *Critical Essays* (London: Routledge & Kegan Paul 1966) 271.
- (6) C. A. Bodelsen, *Aspects of Kipling's Art* (Manchester: Manchester UP, 1964) 100.
- (7) Rudyard Kipling, *A Diversity of Creatures* (Harmondsworth: Penguin, 1994) 352. 以下、この版からの引用は()にページ番号のみを記す。
- (8) Birkenhead, 317.
- (9) Malcom Page, "The Nationality of the Airman in 'Mary Postgate,'" *The Kipling Journal* 37 (1970) 14.
- (10) Trudi Tate, ed. *Women, Men and the Great War: an Anthology of Stories* (Manchester: Manchester UP, 1995) 2.
- (11) Norman Page, *A Kipling Companion* (London: Macmillan, 1990) 107.
- (12) Randal Jarrell, *Kipling, Auden and Company: Essays and Reviews 1935-1964* (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1980) 363-64.
- (13) J. M. S. Tompkins, *The Art of Rudyard Kipling* (London: Methuen & Co. Ltd., 1965) 89.

* 本稿は日本英文学会第82回全国大会(於:神戸大学2010年5月30日)における口頭発表に加筆・修正を加えたものである。

* 本稿は平成20年~22年度文部科学省科学研究費補助金(課題番号20520247)による研究成果の一部である。